方向

第一五九号　一九九三年八月三〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

大通智勝如来

―法華経巡礼　八六―

1993 08 06　原田憲雄

07-03. さて、世尊は、そのとき、次の偈を説かれた。

atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyām imā gāthā abhāṣata //

07-04. わたしは想い起こす、幾千万多数カルパの昔に出現された、両足の最高の人、
大通智勝という大いなるムニ、その当時の無上のジナのことを。（1）
たとえば、たれかが、三千世界の地種を、微塵とし、
微塵の一粒をそこからとって、一千の国土を越えて落とすとしよう。（2）
第二のものも第三のものも同様に落とし、微塵のすべてを落とし尽くし、
この世界がからになり、土の微塵の一切が尽きたとしよう。（3）
それらの世界の、土の微塵は、その量ははかりきれぬが、
それを残らず微塵にして、百カルパ過ぎるたびに標識にする。（4）
あのスガタの完全な涅槃からの、はかりしれぬ幾千万多数のカルパはこのようで、
一切の微塵を標識にしても、しきれぬほどの、多数のカルパなのだ。（5）

それほど久しい過去に涅槃されたあの導師を、また声聞たちを、菩薩たちを、
如来の智とはこのようなものだが、その一切を、昨日か今日のように想い起こす。（6）
このようなものが、比丘たちよ、無限の智をもつ如来の智であり、
わたしは覚った、幾百というあまたのカルパの後に、精妙で無垢な記憶によって。（7）

abhū atītā bahu kalpa-koṭyo anusmarāmi dvi-padānam uttamam /
abhijñajñānābhibhuvaṃ mahā-munim abhūṣi tat-kālam anuttamo jinaḥ //1//
yathā tri-sāhasrima loka-dhātuṃ kaś-cid rajaṃ kurya aṇu-pramāṇam /
paramāṇum ekaṃ ca tato gṛhītvā kṣetraṃ sahasraṃ gamiyāna nikṣipet //2//
dvitiyaṃ tṛtīyaṃ pi ca eva nikṣipet sarvaṃ pi so nikṣipi taṃ rajo-gatam/
riktā bhaveta⟨W:bhavetā⟩ iya loka-dhātuḥ sarvaś ca so paṃsu bhaveta kṣīṇaḥ //3//
yo loka-dhātūṣu bhaveta tāsu paṃsu⟨W:pāṃsū⟩-rajo yasya pramāṇu nāsti /
rajaṃ karitvāna aśeṣatas taṃ lakṣyaṃ dade kalpa-śate gate ca⟨W:gatesmin⟩ //4//
evāprameyā bahu-kalpa-koṭyaḥ parinirvṛtasya⟨W:parinirvṛtasyo⟩ sugatasya tasya /
paramāṇu sarve na bhavanti lakṣyās tāvad bahu kṣīṇa bhavanti kalpāḥ //5//
tāvac-ciraṃ nirvṛtu taṃ vināyakaṃ tāñśrāvakāṃs tāṃś ca pi bodhisattvān /
etādṛśaṃ jñānu tathāgatānāṃ smarāmi sarvāṃ py atha⟨W:vṛttaṃ yatha⟩ adya śvo vā //6//

etādṛśaṃ bhikṣava jñānam etad ananta-jñānasya tathāgatasya /

buddhaṃ mayā kalpa-śatair anekaiḥ smṛtīya sūkṣmāya anāsravāya //7//

『法華経』は、釈尊が大衆の前で眉間の白毫から光を放ち、東方一万八千の仏国土を照らし出すところから始まり、その不思議を、弥勒菩薩が文殊菩薩の過去世の「記憶」によってただそうとし、文殊が過去世を「想起」することによって展開した。その意味を、本稿（17）の「記憶」で触れ、参考としてプラトンの「メノン」からもすこし引用した。

いまのこの章の主題は、釈尊が「過去の世からの結びつき」をかたるにある。その過去世とは「起源（好成）」という国土の「大いなる神通の智慧によって克服した（大通智勝）」如来の世である。いわば「仏」の「教え」の起源を解明しようとするのである。「神通」も「智慧」もまた、記憶や想起と密接なかかわりをもつ。その解説の偈が、「わたしは想い起こす」ということばではじまるのは、たいへん意味がふかい。

07-05. さても、比丘たちよ、大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚ったひとの、寿命の長さは、じつに五百四十万億カルパであった。

tasya khalu punar bhikṣavo mahābhijñājñānābhibhuvas tathāgatasyārhataḥ samyak-sambuddhasya catuṣpañcāśat-kalpa-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇy āyus-pramāṇam abhūt //

07-06. この世尊・大通智勝如来が、まだ無上の正しい覚りをひらいていないとき、最勝無上の壇上で、一切の悪魔の軍隊を潰走させ、撃破した。潰走させ、撃破して、「わたしは無上の正しい覚りを証得するであろう」

と考えた。けれどもそのときにはまだ、諸法は目の前に現われなかった。かれは菩提樹の根もとの菩提の壇に、一中劫のあいだ坐っていた。第二の中劫のあいだも坐っていたが、まだ無上の正しい覚りは証得しなかった。第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十の中劫のあいだも、菩提樹の根もとの菩提の壇で坐り、中断することなく結跏趺坐し、立ち上がることはなかった。心を動揺せず、身も振動することなく、坐り続けたが、しかしまだ、諸法が目の前に現われることはなかった。

pūrve ca sa bhagavān mahābhijñājñānābhibhūs tathāgato 'nabhisaṃbuddho 'nuttarāṃ samyak-saṃbodhiṃ bodhi-maṇḍa-varāgra-gata eva sarvāṃ māra-senāṃ prābhañjit praājaiṣīt parābhañjayitvā parājayitvā 'nuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbhotsyāmīti / na ca tāvat tasya te dharmā āmukhī-bhavanti sma / sa bodhi vṛkṣa -mūle bodhi-maṇḍa ekam antara-kalpam asthāt / dvitīyam apy antara-kalpam asthān na ca tāvad anuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbudhyate / tṛtīyam api caturtham api pañcamam api ṣaṣṭam api saptamam apy aṣṭamam api navamam api daśamam apy antara-kalpaṃ bodhi-vṛkṣa-mūle bodhi-maṇḍe 'sthāt sakṛd-vartanena paryaṅkenāntarād avyutthitaḥ / aniñjamānena cittenācalamānenāvepamānena kāyenāsthān na ca tāvad asya te dharmā āmukhī-bhavanti sma //

※前号正誤　一頁九行　すべて梵本　→　すべての梵本

※謹　告　次号から、発行を遅延し、頁数を減少するなど、状況が不定になりましょうが、同人には変わりなく、他事ながら、ご放念ください。

銅駝悲

落魄三月罷
尋花去東家
誰作送春曲
洛岸悲銅駝
橋南多駕客
北山饒古人

山本のぶを刻（一九八五・一）

李賀　銅駝悲（上）　銅の駱駝が悲しむ

うらぶれたまま　三月おわり
花見にゆこう　東の家へ
たれか作ってやらないか　送春の曲
洛水の岸辺で悲しむ　銅の駱駝
橋の南は　ごったがえす　騎馬の客
北邙山には　どっさりと　古人の墳墓

中国河南省の、洛陽の都の銅駝街に、漢代の銅の駱駝が二つ、道をはさんで立っていた。九世紀の李賀のころにもあって、賀にはそれが、人々の栄え滅びるすがたをみて嘆いているように見えた。官吏登用試験の進士科を受けられなくなったときか、奉礼郎をやめて帰郷したころであろう。これも改訳。

（1993 07 23　原田憲雄）

白居易（詞という詩　五）

1993 08 18　原田憲雄

前回にとりあげた劉禹錫の後期の友人白居易は、禹錫と同じ七七二年に生れ、四年おくれて八四六年、七五歳で亡くなりました。字の楽天によって、「新楽府」や「長恨歌」の作者として、生前から中国はもとより朝鮮・日本にまで知られた唐の代表詩人です。有名すぎて紹介も気がひけますが、経歴を簡単に記しておきましょう。

祖先は太原（山西）の人というが、中央アジアの異民族出身であろうとする説があります。代々官吏でしたが、生まれたときの家庭は貧困だったようです。一六歳、長安に出、詩人の顧況に才能を認められたと伝え、二九歳で文官試験の進士科に、三二歳、さらに上級の試判抜萃科に合格します。劉禹錫は二二歳で進士、二四歳で博学宏詞科を通っていますから、官吏としてはずっと先輩にあたるわけです。白居易はさらに上級の才識兼茂明於体用科に三五歳で合格、この年「長恨歌」をつくり、翌年、翰林学士となり、三七歳、皇帝を諫める左拾遺となり「新楽府」や「秦中吟」などの諷諭詩よって新文学の旗手と見なされます。新楽府の見本を一つ。外国風の化粧をいましめた「時世粧」です。

時世粧　　ナウなメイキャップ
時世粧　　ナウなメイキャップ
出自城中伝四方　　長安の都から出て四方に伝染
時世流行無遠近　　ナウなファッション遠近なく

顋不施朱面無粉　頬に朱ささず顔に白粉なし
烏膏注脣脣似泥　唇にべっとり泥のよう烏膏をなすり
双眉画作八字低　左右の眉は八の字にえがき下げ
妍蚩黒白失本体　美醜黒白みわけもつかず
粧成尽似含悲啼　メイキャップ完成すればみな泣き面だ
円鬢無鬢椎髻様　あるいは丸まげ鬢がなくまるでサイヅチ
斜紅不暈赭面状　紅ぬたくれば蛮人の赤づらそっくり
昔聞被髪伊川中　むかし伊川に髪ふりみだした男をみて
辛有見之知有戎　蛮化する日を予知した辛有という人がいる
元和粧梳君記取　元和時代のファッションに君よ注意せよ
髻椎面赭非華風　サイヅチ髻も赤づらも中華風俗でないことを

四四歳、越権の責めにより江州司馬に貶せられ、四九歳、忠州から中央に帰り、知制誥となります。制誥とは詔勅のことで知制誥はその起草者です。近刊の新釈漢文大系一〇二『白氏文集　六』は、もとの『白氏文集』の巻三一から三六にいたる「中書制誥」全部を収め、「岡村繁著」とあるが、実際には訳も注もすべて二宮俊博氏の手になる力作です。見本として「楊嗣復に庫部郎中・知制誥たるを可とする制」を。

勅権知兵部郎中楊嗣復。朕聞前代制誥、中書令・侍郎・舎人通掌之。国朝已来、或以他官兼領。惟其人是用、

不限於資秩職署焉。予以為然、多由是選。前所命者、時称得人。研実覈名、次第及汝。汝嗣復、根於義訓、播為令器。文煥発而才秀出、不当汨没於郎吏間。況貞元中、汝父為中書舎人、甚称厥職。今使汝継書吾命、成一家言。堂構国華、在於此挙。爾宜兢兢祗励、無隕其礼名。可庫部郎中・知制誥。

権知兵部郎中の楊嗣復に勅す。朕の聞くところでは、前代の制誥は、中書令・中書侍郎・中書舎人が統括してこれを掌ったが、我が唐の御世となってから以後は、時に他の官職についている者に兼任させることがあり、その際は、その人材を得て用い、特定の地位や部署の者に限定されることはなかった、という。朕はこれをもっともであると思い、多くの場合こうした観点から選んできた。前に知制誥たることを命じた者は、当時その人材を得ていると評判であった。このたびも名声と実績とを審かに考えた結果、順番がそなたに廻ってきたのである。そなた楊嗣復は、父の正しい訓えに基づき、それを弘めてりっぱな人物となり、その文辞は光り輝き、しかも才能は抜群であって、郎官の間に埋もらせておくべきではない。ましてや、貞元年間、そなたの父は中書舎人となり、ことの外その職務に適っていた。今、そなたに後を継がせ朕の命令を書かせて、そなた独自の見識ある意見を十分に述べさせる。父の遺業を継ぎ国家の威光を増すのは、このたびの推挙にかかっているのだ。かしこみつつしんで職務に精励し、その名を落とさないようにするがよい。楊嗣復に対して庫部郎中・知制誥たることを許可する。（二宮俊博氏訳）

「新楽府」は、社会現象や政治事件に対する一般的な諷刺・批評で、その影響や結果は間接的ですが、制誥の草案は、個々の政治家や官僚の行動や成績に対する直接の判断・裁決であり、草稿がとりあげられれば、天子の

命令として実行され、対象である人物は、ただちに任免・賞罰され、場合によっては生死にもかかわるのですから、影響や結果は直接で重大です。白居易は「新楽府」作者としてはなやかな批評的ジャーナリストでしたが、また知制誥として鋭敏有能な批評的皇帝秘書であったのです。

かれは、進士の試験を受ける準備中に、出そうなあらゆる問題に応ずる解答をあらかじめ作っていました。かれが合格してから、それが有名になって、模範答案集として受験者によって争って書き写されたそうです。かれの制誥には実際と合わないものがあり、それは擬撰、すなわち模擬制作だとされているようですが、これも、そのような場合を想定して書いておいたか、書いたかしたものだろうということです。

さて居易は以後、地方と中央に出入りし、五七歳、法務大臣ともいうべき刑部侍郎となり、翌年、洛陽に住み、それからさかんに劉禹錫と詩を唱和し、七一歳、刑部尚書で退官し、七四歳、作品全集である『白氏文集』七五巻を完成、七五歳で亡くなり尚書左僕射を贈られました。文学者としても官吏としても至りうる最高の地位に到達した人といってよいでしょうか。

七五巻のうち四〇巻に近い約三八四〇首が詩で、作品の多いことでは唐代随一です。詞はわずかですが、民衆のあいだから生まれたあたらしい形式を取り上げているところに、「民衆詩人」としてのかれの面目も見られましょうし、草創期の作者として、やはり重要なひとりでしょう。

花か花でないのか　〔唐〕白居易　花非花

花か花でないのか　　花非花
霧か霧でないのか　　霧非霧
夜中に来て　　夜半来
明け方いんだ　　天明去
春の夢のようにやってきて　どれほどいたか　　来如春夢幾多時
朝の雲みたいに立ちさって　ゆくえもしれぬ　　去似朝雲無覓処

これは『白氏文集』では感傷・雑言詩の部類にはいっていて、かれが詞と意識してつくったかどうかはわかりませんが、『詞律』にも『詞譜』にも収めているので取り上げました。「幾」字は一本に「不」とします。

前三世紀の宋玉が「高唐賦」に描いた巫山の神女を背景において、きぬぎぬの別れをうたい、おもしろいものです。一一世紀の張先が、これを「御街行」という詞牌の形に拡張し、一六世紀の楊慎が、「高唐賦」や曹植の「洛神賦」も、〃奇麗〃さにおいてはこれに及ばない、とほめています。

じつは、漢の武帝が愛人の李夫人と死に別れたときうたった「李夫人歌」、

おまえでは　　是邪
ないのか　　非邪
立って　　立而

見ようとすると　　望之
ゆらゆらとして・・・　　翩翩
どうして　　何
ためらって　　姍姍
ここに　　其
来ようとは　　来
しないのか　　遲

をかれ流に作り直したものなのです。巧みではあるが、武帝の作の前におくと、痛恨そのものである「李夫人歌」の悲嘆の響きはなく、言葉の遊びが、浮き出します。

詞としては、次に掲げる「憶江南」の連作三首を代表とすべきでしょう。

江南は　〔唐〕白居易　憶江南

江南はすばらしい　　江南好
こころに焼きついたその風景　　風景旧曾諳
日の出には　河辺の花が火よりも紅く　　日出江花紅勝火

春になったら　川の水は藍よりあおい　　春来江水緑如藍
憶わずにいられよか　江南を　　能不憶江南

居易は、少年時代にも江南を旅行していますが、八二二年、五一歳、杭州刺史になり、八二四年、五三歳、任満ちて太子左庶子として洛陽に勤務し、八二五年、五四歳、蘇州刺史に除せられ、翌年、病によって洛陽に帰ります。この杭州と蘇州の刺史だったのがかれの「江南」時代です。

「長慶二年七月、中書舎人から杭州刺史に転出し、赴任の途中、藍溪での作」という詩に、

昔予貞元初　　むかしわたしは貞元の初年
羈旅曾遊此　　旅してこの地に遊んだものだ
甚覚太守尊　　太守の地位の高さには目をみはり
亦諳魚酒美　　また魚や酒のうまさが心にしみた
因生江海興　　江海放浪癖が生長するにつれ
毎羨滄浪水　　「滄浪の水」を歌った人が羨ましく
尚擬払衣行　　役人をやめてでも行きたかった
況今兼禄仕　　こんどはなんと俸給つきで赴くのだ

と歌ったように、そこは早くからあこがれた、風景にすぐれ、文化的にも経済的にも豊富で絢爛な境域であり、

自身は「新楽府」で批判の刃を研いだ少壮の鋭気はおさまり、政治の実務には老熟し、名声は高く、帝側に仕える緊張はなく、地方官としての気楽さと、趣味人としての情欲を十分に尽くしえたので、ここでも治績はつんでいるものの、かれの生涯でのもっとも享楽的な時期だったといってよく、それをさらに気楽な洛陽勤務の太子少傅という役の、しかし体力的にはすでに衰えていた八三八年、六七歳以後に、回想してつくったのがこの詞です。

「河辺の花が火よりも紅い」「川の水は藍よりあおい」は、はなはだ印象的ですが、外部の花や水を詠じるだけではありません。「滄浪の水」を歌った人とは、屈原の「漁父の辞」の漁師のことでしょう。次は第二首。

江南はなつかしや　　江南憶
なかでも杭州のなつかしさ　　最憶是杭州
山寺の月かげに　たずねた香る木犀の花　　山寺月中尋桂子
郡の公舎の枕べから　まざまざと見た大渦潮　　郡亭枕上看潮頭
いつまた遊びにゆけるやら　　何日更重遊

「憶わずにいられよか」と第一首でうたった江南の、もっともなつかしいもの。それは杭州で、杭州での思い出もさまざまながら、もっとも記憶にのこるのは、天竺寺や霊隠寺の木犀の花と、銭唐江の大渦潮だ、というのです。

七世紀の詩人宋之問が、杭州の西の武当山にある霊隠寺にゆき、月の光に照らされて、

鷲嶺鬱岧嶢　　鷲の御山はぐっとそびえたち
竜宮鎖寂寥　　竜宮のような寺はひっそり鎖されている

の二句ができたが、後が続かず困っていると、老僧が出てきて、わけを聞き、

楼観滄海日　　楼にのぼって青海原の太陽を眺め
門聴浙江潮　　山門にたたずんで浙江の潮騒を聴く

とつけてくれたので、そのあと、

桂子月中落　　木犀の花は月からこぼれ落ち
天香雲外飄　　天上の香りは雲の向こうまでただよう

などと続けて一四句の律詩を完成させることができました。翌朝たずねると老僧はいなくなっていて、別の僧に聞くと、あれは則天武后に反乱した詩人の駱賓王の世をしのぶ姿だ、とこたえた。そんな話が残っています。

伝説の面白さにもよりましょうが、すでに篤い仏教徒となっていた白居易は、有名な寺院には心ひかれたのでしょう、「天竺・霊隠両寺に名を書き留めて」という詩に、

在郡六百日　　郡にいた六百日
入山十二廻　　寺に来ること十二回

と歌っています。そうしてやはり仏教徒の宋之問と同じようにこぼれた木犀の花を拾うのが、興ふかかったので

しょうか。

なお、桂は中国では一般に木犀をさすので、桂子を木犀の花と訳しましたが、月の中には桂の木が生えている、という神話がありますから、その桂の種という意味でもあり、神話の桂の種と現実の木犀の花とを結び付けてよいかどうかは微妙ですが、ここでは立ち入らないでおきましょう。

いまの省の名になっている浙江は、その省の代表的な河川ですが、杭州のまちの東南から東北流して杭州湾に注ぐまでを銭唐江または銭塘江といいます。杭州湾が満潮になると、高潮が杭州まで逆流します。これは毎日のことですが、陰暦の八月十八日、中秋の三日後が最大で、数百里にわたって高さ数丈の高潮がおしよせ、それが見ものになっていて「観潮（かんちょう）」というのです。名は聞いていてもその実際を知らなかったのですが、一〇年ほども前でしょうかテレビで紹介され、壮観に驚きました。海国に育った者にもそうなのですから、海に縁の遠いところで成長した白居易にとっては大驚異であり、観音経の「海潮音」とはこのような音かとなつかしく、宋子問の詩句にはめこまれた駱賓王の「浙江の潮騒」が、物理的な江湾の潮音のみでないことを、味わい直したのではないでしょうか。次は第三首。

江南はなつかしや　　江南憶
次になつかしい呉（ご）の宮殿　　其次憶呉宮
さても呉の酒　一杯の「春竹葉（しゅんちくよう）」　　呉酒一杯春竹葉

呉の姫たちの　連れ舞いの「酔芙蓉」　　呉娃双舞酔芙蓉
いつかまた逢いたいもの　　早晩復相逢

「呉」は、周の太王の長子太伯が荊蛮に奔って開いた国とされ、江蘇から浙江北部にかけての地域を指し、前四七二年、太伯の子孫の呉王夫差が越王句践に滅ぼされました。そののち三国の孫権など、この地域に拠った人たちが国名を呉とすることが多いので土地の雅称となり、せまく限って蘇州や呉県の別名としても使われます。

さて、『呉越春秋』によれば、呉とその南の越とはたがいに争い、会稽の戦いで越が敗れると、越王句践はいわゆる臥薪嘗胆の努力によって復讐しようとし、西施と鄭旦という美女を呉王夫差に献じます。夫差は喜んで二人の女ために館を築き、そこで日夜遊楽にふけってやがて国を滅ぼすのです。その館に住む美女を館娃といい、その館を館娃宮といい、呉県の西南の霊厳山にあって、霊厳寺がその故址だといわれています。

居易は「霊厳寺に題す」という詩に「寺は呉の館娃宮で、鳴屧廊、硯池、採香径などの遺跡がある」と自注し、

娃宮屧廊尋已傾　　館娃宮も鳴屧廊もたずねてみればすでに傾き
硯池香径又欲平　　硯池も香径もまた平坦になりかけている
二三月時但草緑　　春の二月三月という好季節にただ草ばかりが緑で
幾百年来空月明　　幾百年のあいだむなしく月かげのみが明るい
使君雖老頗多思　　刺史どのは老いたりといえすこぶるの感激家

携觴領妓処処行　　杯を携え歌妓をつれてあちこちをさまよう

などとうたっています。「鳴屐廊」は京都の知恩院の「鶯ばりの廊下」のようなものでしょうか。

さて、詞の「呉の宮殿」は館娃宮、「呉の姫たち」は西施などをさすのでしょうが、連れていった妓女たちに演奏させことをもあわせて描くのです。古来、名酒に「竹葉」というのがありますが、それは呉の酒ではありません。しかし「○○春」というように酒の銘に「春」の字を使うことが多く、当時、呉にも「竹葉春」というう まい酒があって、霊厳寺に携えた「觴」に入れていったのがそれだったのでしょうか。

「醉芙蓉」は、連れ舞いの名でしょう。京劇の名優梅蘭芳(メイ・ランファン)が楊貴妃に扮して踊った「醉牡丹」が連想されます。ところで、居易は若いころ霓裳羽衣(げいしょうう い)の舞いを見て感動し、「長恨歌」で玄宗と楊貴妃の悲劇の始まりを「驚破す霓裳羽衣の曲」とうたい、杭州刺史になったとき、樂妓に印象を語って演奏を仕立て、それらしいものにはなったようですがが満足せず、蘇州の刺史となってから、友人の元稹の教えを参考にして自分の愛妓に霓裳羽衣の舞いを仕込み、そのことをまた「霓裳羽衣の歌」にうたっています。そうしてそこで館娃宮のことにも触れていますから、詞では言っていませんけれども、「醉芙蓉」とともに「霓裳羽衣の曲」も演奏させたり舞わせたりしたにちがいありません。

この詞を作った後の八三九年、六八歳の白居易は中風にかかり、しばらくして愛妓たちに永の暇(なが いとま)をあたえます。

柳老春深日又斜　　柳は老いぼれ　春ふけて　日もかたむいた

任地飛向別人家　　花よ　どなたのとこへでも　飛んでおいでよ

衣　笠　山

1993 08 21　　原　田　慶

等持院のうしろなる山なり。仁治年中に内大臣藤原家良公別荘を建て給ふ。
衣笠内大臣といふはこれなり。

はるかなる都のいぬゐ我が宿は大内山の麓なりけり　　衣笠内府

『都名所図会』にはこのように書かれている。標高二〇一メートルという小さな山で、まわりには、等持院のほかに金閣寺、龍安寺があり、近年まで北側に蓮華谷火葬場があった。

わたしはこの山の東側の麓にある金閣小学校に三年間勤めていた。毎日仰ぎ見る衣笠山は、季節によって、若葉や紅葉に景色を変えはしたが、松が多く、一年を通じて緑の豊かな山だった。この山は、形の美しさから衣笠山と呼ぶのだろうと思って眺めていたが、いわれはいくつかあるらしい。そのひとつに、宇多法皇が御室におられたころ、真夏に雪見を思いたち、山に白布を掛けさせて、冬景色を楽しまれたとか。反対に、金閣寺の主の足利義満がこの山の雪景色を見て、白絹を掛けたようだと愛でた、などの説もある。また、古くから葬送の地であり、遺体を絹掛や衣笠でおおって放置した風葬の名残りだとも言われる。この山の龍安寺側の峰々には、一条、

堀川、後朱雀、後冷泉、後三条など天皇の陵墓があって、葬送の地であったことは知られるが、山裾の開発が進み、金閣寺から衣笠山の中腹を越え、等持院の裏を抜け龍安寺の前を通って、御室、妙心寺の横へ出る観光道路がついたために、あたりの様子はすっかり変わったのだそうである。作家の水上勉氏が等持院に小僧さんとしておられた頃には、衣笠山の裾野は茶畑とクマザサにおおわれた寂しいところで、山裾はずっと境内まで広がっていたそうだけれど、いまはそこに立命館大学が建っている。あの下には人骨がごろごろしていたはずだ、その上にあの学校が建っているのだ、と話されたことがあった。大徳寺に居られたのを、何かあってその寺を飛び出し、行くあてもないのでうろうろしているところを、等持院の坊さんに拾われたのだとも、お話のなかで聞いた。

地図を見ると、衣笠山の北東に金閣寺があり、南側の西寄りに等持院、西側のすこし南へ下ったところに龍安寺がある。衣笠山から等持院のあいだの裾野に堂本美術館があり、その前を道路が通っていて、道路の下に立命館大学があるから、等持院までの裾野はずいぶん広かったということになる。美術館の裏、東の山腹に衣笠幼稚園があり、そのすぐ下に衣笠中学校、その下の宇多川という細い流れを隔てて金閣小学校が建っている。つまりわたしは毎日、山の東側の姿を見ていたことになるが、校庭から見上げる衣笠山は、二つの峰にふわっと布を掛けたようにやさしい曲線をもつ姿をしていた。

学校の裏門から出て宇多川に掛かる小橋を渡り、川に沿って氷室町の方へ山をまわって行くと、金閣寺の裏に小学校の第二グラウンドがある。用具室が建っているだけの広いところで、運動会などはここで行なわれたので、学校から用具を運んで準備をするのは大変だった。体育も週に一度はそこまで行くのだけれど、まさに衣笠山の

すぐ麓で、金網の外は、手を伸ばせば山の木の枝に手がとどく。あるクラスがここで体育の授業をしていたら、山から野性の猿が入ってきたので、子ども達に騒がないように言ってじっと見ていたら、金閣寺の庭へ入って姿を消したといっていた。

このグラウンドの金網の外の細い道を、山の下の谷川に沿って北へまわって行くと、木の繁ったうす暗いところに不思議不動明王が祀られている。子ども達をつれて植物採集に行ったときには、きれいに掃除されていて、知っている子どもは水を掛けて手を合わせたりしていた。北側の茂みの陰なのであまり陽が射さないせいもあって少し気味が悪かった。それから十年もここを訪ねたことがなかったが、通りかかったので、思い切って入っていってみると、いくつも並んだ小さな祠は傾き、不動明王の祭壇もこわれそうに干からびて、賽銭箱がひっくり返っている。お守りしていた人の家は閉ざされて、受け付けの窓口にも板が打ってあった。以前にはなかった小さな家が置かれ、人が住んでいる気配はないのに、犬が二匹つながれていて、わたしを見て大きく吠えたてた。この荒れように驚いたけれど、どうしたことかと見まわすと、この不動さんを閉じ込めるように、すぐ前に立命館大学の新しい校舎が、高々と立ちはだかっていたのである。

以前はこのあたりは畑で、ずっと金閣寺の森のほうまで見渡すことができた。いまは目の前を鉄筋の壁にふさがれて何もみることができず、この一角が見捨てられた場所のような感じになっている。わたしは恐ろしくなって、引き返すこともできず、行く手に人家の見えるほうへ進んでいった。見憶えのある家のまえを通って、原谷へ行く自動車道路に出た。そこから金閣寺のあるほうへ戻り、途中で立命館大学の校舎のまえを通ると、門前に

国際学関係の校舎であることが記されていた。門からまっすぐ奥に、太くて二階の上まである高い柱をもった白いギリシャ神殿のような玄関が見え、後には衣笠山が静かにひかえている。この立派な殿堂とみどりの美しい衣笠山の狭間に、荒れ果てた不動明王や繋がれたけたたましい犬達がいるなどと、とても想像することはできない。わたしたちは弱いもの衰えたものを片隅へ押しやって、あまりにもたやすく忘れてしまうもののようである。

門の中へすこし入って、守衛さんに校舎のことをたずねてみると、

「この校舎は、一九八八年の四月から講義が始まりました。このあたりはこぢんまりしたいい所ですよ。冬になって雪が降ったときなんか、一面にまっ白になってそれは美しいです」

と言われた。わたしも校庭で雪合戦をしたことなど思い出したが、衣笠山に雪が積もったという景色は浮かんでこなかった。守衛さんは、山もまっ白になりますと言われだから、やはり足利義満が、雪景色を愛でたというのはほんとうなのだろうと思う。

話は変わるが、金閣小学校にいたあいだのある時、男子児童の一人が、友達とけんかをしてどこかへ行ってしまったということがあった。授業中だったが職員が集められて、校舎の内外を手分けしてさがした。物置きやトイレ、第二グラウンドまでさがしたが見つからず、外へ出たかもしれないので、ひとまずそれぞれ自分のクラスへ帰り、手のあいている人だけが学校の外へさがしに出た。後で、その子どもは家へ帰って、家人の知らないうちに二階へ上がっていたということがわかったが、けんかをした後、その勢いで衣笠山へ駆け上がり、しばらく山に居て家へ帰ったということだった。わたしはその時まで知らなかったが、衣笠山にはマンガンを採掘した跡

がそのままになっていて危険なので、子どもがかってに登ってはいけないことになっているのだそうである。いつも緑の濃いこの山はその姿を眺めているべきで、登ろうなど思いはしなかったが、マンガンが採掘された跡があるというのは意外だった。京都の山について調べてみると、周りの山々には、幾つもマンガン鉱山があるということである。北山では、鞍馬の奥、花背峠の近くのオバ谷や、そのずっと奥の大悲山の桑谷、西山では、愛宕山の水の尾の近くがそれだという。今ではどこも掘られていないのだろうけれど、マンガンというものは、製鋼につかわれるもの、乾電池やマッチの原料になるものなどがあるそうである。

風葬の地であり、まわりの寺院の庭園の借景ともなってきた衣笠山が、マンガンを採掘される時代を経て、今では学校や住宅に山裾をすっかりおおわれ、頭だけを出して黙っている。中腹にある堂本美術館は、近年、府に寄贈されたので、京都府立という石碑が新しく置かれて、財団だったころとすこし様子を変えている。その周りの山や、道路を隔てて下のほうへ等持院までは立命館大学の様々な設備が置かれ、夏休み中でも運動クラブの学生達の元気なかけ声が山に響き渡っている。その昔、衣笠山に葬られて静かに眠っていた人々の魂は、さぞびっくりしていることだろうと、この地に立ったときにいっそう感じる。

金閣小学校にいた三年間の最後の年の三月、学年主任のS先生の発案で、二年生、四クラス全員で衣笠山へ登ろうということになった。たぶん衣笠幼稚園の出身の子どもが多いので、そこからすぐ上の山へ登ったことのある子どもが沢山いたのだと思うけれど、S先生はじめ他の三人の担任は、誰も山へ登ったことがなかった。

堂本美術館の上手から山へ入り、東の斜面へまわって行くと衣笠幼稚園があり、その運動場の上に細い道がつ

いている。そこからは、京都市を東から南へ遠く見渡すことができた。向いの比叡山、右へ大文字山などの東山連峰、左へ北山がなだらかに連なってみえる。衣笠山の入り口は幼稚園の校舎のすぐ左からで、丸太の階段が、土砂の流れを防ぐように無造作に、十段ほど杭で止められている。その階段を過ぎると急な山道である。大人の足なら二十分ほどで頂上に着くと聞くけれど、子ども達は我れ先にと登るので、かえって速いくらいである。

わたしのクラスには、J君というすこし筋肉の発達のおくれている子どもがあった。遠足のときなどは、いつもこの子どもの手をとって、わたしが学年の先頭を歩いた。稲荷山へ登った時も、八十八ヶ所を歩いた時も、J君の歩調に学年全員が合わせたのだった。

衣笠山は急斜面が多く、J君を先頭にしてはとても登れなかった。わたしのクラスが最後になり、みんなでJ君を助けて登った。それでもだんだんまどろっこしくなって、元気な子ども達は先に行ってしまい、最後までJ君を助けたのは数人の女の子だけだった。わたしは山登りには自信があったので、途中でJ君を背負って登ろうと考えておぶってみた。J君はつきたてのお餅のようにべったりと背にくっついて、その軟らかさと重さに驚いた。わたしは五十歳に近い自分の年齢を忘れていたらしい、子どもを背負って山を登るほどの体力はもうなかった。ほんのすこし登ったところで面目ない思いをしながらJ君を背からおろした。その後は、女の子達に押したり引いたりしてもらって、それでも家の人と山登りなどしているJ君は、負けずに頑張って上まで行くことができた。

先に登った人達は待ちくたびれて、もう早く下りたいと思っているところだったらしい。茂みを分けてわたし

達が進んで行くと、わたしのクラスの男の子数人が、様子を見るために引き返してきた。その中にT君もいたが、この子は、汚すこと汚れることにおかまいなく、絵を描いても字を書いても大胆によごし、食べるにも口いっぱいにつめて笑い、こぼしたり汚したりしても平気というような、体裁をかまわない子どもだった。それで入学当初は担任から知能の発達が遅れているのではないかと疑われたらしくて、わたしが家庭訪問をした時に、特別の学級に入れなければならないだろうかと相談された。とんでもないことで、ふつうの子どもだったのである。ただ、かっこうよく、行儀よく、他人に褒められるようにしようというような気持がまったくなかった。それでも四十五分の授業時間は机にいて、作業もそれなりにしていた。心にとらわれのない明るい子どもで、ほんのすこし幼児性が、他の子どもより多く残っていたのかもしれないが、人間らしい温かみを感じさせた。

引き返して来たうちの先頭の子どもが、J君やわたしの姿を見つけて「あッ来はった！」と叫んだ。後に続いていた子どもに次々と「来はったぞ」と伝わると、後のほうにいたT君は「来はった？」と木の間をすかして、わたし達の姿を確かめ、「来はった、来はったぞ、よおかったなあ」と後の子どもを振り返った。近づいて行きながら、その子ども達の様子を見ていて、わたしは何ともいえずうれしかった。「よおかったなあ」と言ったときの安心と満足の入り混じった子どもの顔を、わたしは忘れることができない。衣笠山はわたしにこの子ども達のやさしさを思い出させてくれる山であり、見るたびに不思議な親しみを感じさせてくれるのである。

帰りには、男の子達がJ君を引き受けて、「この枝を持って」「ここへ手をついて」「ここは滑り下りて」などと教えながら、あっという間に山を下り、なんなく学校に帰り着いたのであった。